

ところだつた。

「だつて可哀さうだつたわ。」と、幾らか小野だけに聞えるやうに、低い聲をして云つた。「あの女の、随分憎らしいのね。どうしてあんなに悪く、あのお嬢さんをお書きになつたの。」

「だつてさうしないと芝居になりませんか。」

「でも、あの医者さん、貴方御自分の積りなんぞせう。」

冬子嬢は小野に、押搦ひ半分ながら、半ば眞面目に追究して來た。

「さうでもありませんけれど、……」

小野はわざと曖昧に、微笑で濁した。

「いえ、きつとその積りよ。ですけれど、貴方がもしあゝいふ目に遭ひになつたら、やつぱりあの医者さんみたいに、一生懸命勉強なさる？」

「さあ、どうですか。意氣地がないから、できないでせう。しかしどつちにしる、あんな目には遭ひたくないもんですねえ。」

小野も半分眞顔で答へた。

「それに、あんな女の人はゐないと思ふわ。」

そんなことで、その場の話は済んで了つたが、その對話が後になつて、識を成さうとは、小野も、或は恐らく冬子嬢自身も全く知らなかつたであらう。或はまたその頃から既に、冬子嬢の心には、潜在的にさういふ心が潜んでゐ、またそれを本能的に豫知して、小野も自分の境遇を、その芝居に擬へてゐたのかも知れない。……

しかし小野としては、その頃は表面の事實上、夢にもそんなことを感じなかつた、幸福な時代だつ

た。得意な時代だつた。而して、まさかそんなことはあるまいと思へばこそ、そんな芝居を書いて、最悪な場合を想像して、享樂してゐたにちがひなかつた。兎にかくそれは小野の戀愛の、黄金時代ともいふべきものだつた。

先輩は蔭ではいざ知らず、もうそれつきり強ひて、小野の問題に就いて反對しようとはしなかつた。曲折を経た小野の戀は、波瀾の後の平衡状態を以て、その儘ずつと過ぎつゝあつた。そして猶も順調に進んで行きさうに思へてゐた。

季節の春は、かうしてゐるうちに、いつとはなく過ぎ去つて了つてゐた。が、小野にとつてはその春が、短くしてしかも永いものだつた。彼の心にはいつまでも永く、その春が残つてゐる思ひがした。

第十三章

やがて、重苦しく、甘く、惱ましかつた春は去つた。そして夏は來た。勝見家の庭では、先生が遺愛の芭蕉が、巻いた葉を腕のやうに伸ばし始め、梧桐が仄黄いろい緑を一面に擴げた。小野の心もいろ／＼な波瀾を経て幾らか新緑のやうに軽らかなつてゐた。

七月には、黒田と杉浦とが大學を卒業した。二人は柳井や小野と同期だつたが、中途で怠けて休んだりしたために、一年遅れたのだつた。彼らは殆ど講義へも出なかつた。だから學校を卒業したつて、別に平常と變りはない程だつたが、兎に角芽出度く、學士號だけは得た譯だつた。

黒田は、當時既に侃々諤々の文學論を以て、有名な新進評論家であるに係らず、一方又對からず政治的方面へも趣味をもつてゐたので、法科に席を置いてゐたのだつた。そして卒業と同時に、灘の養家の方へ歸つて、養父のやつてゐる鳥渡大きな醸造會社の、事務を助けなければならぬ筈になつてゐた。が、希望と元氣に満ち／＼た彼は、さうして地方の家へ引込むのを欲しなかつた。それで彼はその儘、養父の意志に反對して、東京に停つて職業を見つけることに決めた。そして幾ら歸れと云はれても、決して灘へ歸らうとはしなかつた。それでたうとう養父と喧嘩をして、自分一人で生計を得なければならなかつた。黒田の許婚だつた人も、黒田が養父と衝突して東京にゐることになると、彼女もまたその家を去つて、黒田の許に投じて來た。彼女もその年に音楽學校を卒業してゐた。そして眞淑な一本氣から、親を棄て／＼も飽く迄許婚たる黒田に一生を托したのだつた。さう美しいといふ程ではなかつたが、色白の大人しい感じのいゝ人だつた。黒田はその人を、さう深く愛してゐる譯でもなかつたが、さうして萬事を棄て、自分の所へ來り投じられては、彼も心を動かされずにはゐなかつた。彼等は谷中の閑靜な場所に、妾宅の跡のやうな家を見付けて、そこに楽しい同棲生活を營むことになつた。

「せめてピアノの一臺も置いてやりたいんだけれど、今の状態では逆もそんなことはできやせん。暫く弾かないでゐると、指が硬ばるさうだから、どうかしてやりたいと思つてゐるんだがね。」
 黒田は何かの折りに、皆の前でそんなことを云つてゐた。彼は當時、Y新聞社の社長を知つてゐたので、その傳に依つてその論說記者になつてゐた。そして大學を卒業したばかりの、若い無經驗な記者としては、彼の文藝評論家としての名聲の爲に、地位も収入もかなり優遇されてゐた。
 「黒田は、何のかの言つても、幸福だね。」

小野はそんな話の後で、自分の身と引比べながら、述懐めいて云ふのだつた。

「さうね。」と、傍にゐた塾子夫人も合種を打つやうに言ひ出した。「結婚生活ではひよつとすると、黒田さんが一番幸福かも知れせんわね。何しろ奥さんは家を棄て／＼まで、貴方の方へ來ていらつしやるんですもの。考へて見ると、貴方もなかく色男なのね、これで。」

「何を仰しやるんです。」黒田は甲申高な調子で、頭を掻くやうにしながら云つた。「そんなことがあつて見れば、それやア僕だつて、あゝいふ場合になれやア、人生意氣には感じますがね。併しかう「贅澤仰しやい。貴方みたいな人を、たつた一人頼りにしてゐるんだから、よつほどよくして上げなくちや濟みませんよ。」

夫人は窘めるやうに云つた。

「さういふ荷厄介なら、僕も背負ひ込んで見たいな。」
 小野は冗談めかして、——そんなことを云つたりした。

兎も角もそんな譯で、黒田は一番先に家庭を作つて、落着いたのだつた。

が、杉浦はさうはいかなかつた。彼の卒業したのは哲學科だつた。彼の家が越後のある寺だつたので、彼の家では長男である彼に、佛教哲學が何かを研究させて、天晴れ一宗の碩學に仕立て、寺を嗣がせようとする積りらしかつたが、彼も亦黒田と同じく、自分の家の寺へ歸つて、僧侶となることを欲しなかつた。けれども、卒業して了つて見れば、何は兎もあれ歸省しなければならなかつた。彼は暫く愚圖々々はしてゐたが、故郷の方から頻りに歸れと云つて來るので、たうとう一とまづ歸郷することに決めた。

「……何でも故郷の方ぢやア、細君の候補者まで探してあるらしいんだよ。」
 杉浦は愈々歸ると決心した時、小野に會ふとそんなことを云つてゐた。

「さうかい。そいつは困るね。でも、いゝんだつたら、貰つて來てもいゝぢやないか。」
 小野もこんな風に答へた。彼は何となく杉浦に濟まないやうな氣持と共に、杉浦に對してまだ漠然たる競争者意識があつたので、杉浦が兎も角も別な細君を貰ふなら、貰つてくれた方が安心だと思つてゐた。

「うむ。けれども俺には、細君を貰ふなんて興味もない。——貰つたら君も安心するだらうがね。」
 杉浦は例の暗いによく笑ひを浮べて、冗談らしくさう云つた。彼は小野の内心の心持を、幾らか察してゐたのだつた。

「うむ、それはさうだね。」

小野は暖い苦笑と共に、すぐそれを肯定せざるを得なかつた。

「俺も時々はいつその儘故郷へ歸つて、両親の云ふ通りの細君でも貰つて、家へ引込んでしまはうかとも思つてゐるよ。そして小學校の先生か何かしてゐる方が、却つて幸福かも知れない。」

杉浦は訴へるやうにそんなことを云ひ出した。さう云はれると小野は、嘘にも『さうだね。』とは合槌も打てなかつた。そのときの小野の眼には、さういふ杉浦の心持が、幾らか解れば解るだけに、自分の幸福と比べて、この友に濟まないやうな氣がしてならなかつた。

「そんなことはないよ。君だつて東京に踏み止まつて、勉強さへすれば何とかなるよ。僕だつてさう思つて石に齧りついても頑張つてゐるつもりなんだ。今からそんな歸去來の心なんぞ起しちやア駄目だよ。だから君も、一旦ア故郷へ歸つて、家の方は何とか話をつけて、早くまた東京へ出て來いよ。」

できることなら僕もさういふことになるやうに飽くまで盡力するから。」

「うむ。なるべく早く出て來よう。僕だつて田舎へ引込むのは厭だからな。いづれ、何分とも宜しく頼むよ。何でも、差し當り食つて行けるやうな口でもあつたら、早速知らせしてくれ。すぐにも出て來るから。」

「さうか。」小野は鳥渡言葉を切つて、それから前に思ひついてはゐたことだが、改めて云ひ出した。「それならどうだい。君さへ差支なければ、勝負さんへ家庭教師に置いて貰つたら、君が厭でなかつたら、僕から奥さんにさう云つて、願つて見てもいゝぜ。きつと奥さんも喜んで承知するよ。向うでも君なら、よく氣心も解つてるし、新太郎ちゃんも淳二君も懐いてゐるから、雙方都合がいゝだらうと思ふんだ。」

「うむ。それやア願つてもない好都合だがね。何なら君から機を見て、一つ奥さんにお願ひしてくれ給へ。それだけでも定れば、一旦家へ歸つて、何とかして出て來るから。」
 「承知した。ぢやア機を見て、お願ひして見よう。」
 「何分よろしく頼む。」

さういふ話をし合つた後、杉浦は七月半頃に、越後の家へ歸つて行つた。別に永い別れでもなかつたが、散歩がてらに、小野は送つて行つた。停車場前の小さいレストランで、ビールを一杯づゝ飲み合つて別れを告げた。

「ぢやアまた早く上京しろよ。」

「うむ。」

杉浦は口數少く別れて、改札口に入つて行つた。

その後影を見送つて、小野は踵を返すと、何とはなしに感傷的な思ひに、だん／＼包まれて来た。杉浦を自分の競争者としては考へない迄も、何となく敗れて歸る人を見送つたやうな氣がした。自分か彼を犠牲にしたとは、決して考へないまでも、何だか濟まないやうな、氣の毒のやうな思ひが、自ら湧いた。と同時に、杉浦には濟まないが、何となく彼を見送つて了ふと、吻と安堵するやうな氣持を覺えたことも、意識せずにはゐられなかつた。その頃は、小野ももう杉浦を、決して競争相手としての考へてはゐなかつた。寧ろもつとすれば、一種の濟まない感情と、自分でも知らぬ程度の優越意識をもつてゐたに過ぎなかつたらうが、兎も角も彼が去つて、これから當分小野一人で、勝負家の恩寵を獨占し得ると思ふと、何となく邪魔物が去つたやうな氣がしないではなかつた。杉浦に對する氣の毒な感情も感情だつた。が、それと同時に彼は、自分がこれから益々幸福であることを思ふと、やうやく夏らしく輝き初めた白日の下を歩きながら、彼は友と別れた淋しさを越えて、何とも云へず感傷的な祝福の氣持に浸りながら歸つて来た。「杉浦が永久にこの儘故郷にゐてくれたら。」その心の底では、ひそかに本能的にかう慙くものがあつた。が、併し心弱い小野は、さう利己本能の命ずるまゝに、強くさうした考へを、高潮する勇氣などは更になかつた。却つてすぐに、その利己的な内心の嘸きを悔いて、自ら責めるやうな氣持になつてゐた。そしてその償ひとして却つて、杉浦のために盡力しなければならぬと思つた。——さういふ所が小野の性情の、最もよい所であると同時に、また最も悪い所であつた。

翌日、小野は勝負夫人を訪ねて、早速杉浦のために家庭教師として、その家に置いてやつてくれるやう、内意を尋ねた。夫人はもとより喜んで承知してくれた。

「——さうですか。それやア丁度ようござんすわ、今年も新太郎と淳二を、葉山へ海水浴にやる積り

で、伯父さんとこの圭之助さんを、——（それは長三氏の長男で、名古屋の高等學校へ行つてゐる青年だつた。）泳ぎの方の目附役に頼むことになつてゐるんですが、その上に杉浦さんが行つて、學科の方なり何なり監督して頂ければ、この上もない好都合ですわ。だから御都合のいゝ時、いつおいでになつてもようござんすわ。」

「有難うございます。お蔭で杉浦も助かります。」

小野は夫人の承諾を得たことを、吾がことのやうに喜んだ。そしてその旨を早速、歸郷してゐる杉浦の許へ知らしてやつた。

それから一週間ばかり経つと、折り返し杉浦から手紙が来た。それは勝負家方小野宛にしてあつて、かなり長い手紙だつた。

その中には、彼が歸つてからの、不快な故郷の狀態や、有難迷惑な結婚談や、父母の思惑などが、いろ／＼と書かれてあつた。そして一刻も早く、さういふ周圍から逃れて、また東京へ出たいと思つてゐたところへ、小野からの手紙が着いたので、救ひを得たやうな心持で非常に嬉しかつたことや、いつに變らぬ勝負夫人の同情や、小野の盡力などを非常に感謝する旨を、長々と書き記してあつた。而して更に、また小野の好意に甘えての願ひには、さうした譯で一日も早く出京したいが、まだ歸つてからさう日數も経つてゐないので、どうも家を出難いから、改めて勝負夫人の名で、正式に杉浦に家庭教師に来て貰ひたい旨を云つて寄越して貰ひ、またその上に手數だが、適當な日に「すゞこい」といふ電報を打つて貰ひたい、といふ用件が記されてあつた。

小野はすぐにそれを、磐子夫人に見せて相談した。

「……奥さん、杉浦からかう云つて来てゐるんですが、どうせう。一つ杉浦の云ふやうに、事を運

んでやつて下さいませまいか。手紙や電報はお許しさへあれば、僕がうまくやりますから。」

「さうね、それやア貴方がたのことだから、何でもお世話はして上げる積りですけれど、そんなことまでして、引止めたがつてゐる親御さんたちを出し抜いちゃア悪くない？」

「それやアさうですけれど、かういふやうな事情で、杉浦も家を出たがつてゐるんですから、可哀さうぢやありませんか。どうせ彼奴は家を嗣いで、坊主になんぞ成りやしませんよ。この間も龍藏といふ坊主名を嫌つて、一字に改名した位ですからね。何でも家の方は、末弟に嗣がせるとか何とか云つてゐましたから、關ひやしません。一つ男一人を救つてやる積りで、許してやつて下さい。今、さういふことでもしてやらないと、つい色々な羈絆が生じて、なか／＼出て来られなくなつて了ひますから。お願ひします。どうかさういふ風に取計ふのを許してやつて下さい。」

小野は友のために、熱心にかう願つた。

「ぢやアさうしてお上げなさい。家でも、どうせ来て頂くんなら、夏中から子供たちを見て貰ひたいと思つてゐたんですから。來たらすぐ葉山へ一緒にやつて貰ひませう。」

さう云つて、一應鳥渡躊躇した夫人も、すぐまた承知してくれた。

「有難うございます。それぢやアすぐ、さういふ風に運びませう。」

小野は安心して、夫人の代りに杉浦の所へ召喚の手紙を出した。そしてそれから一兩日後に、機を見て電報を打つた。

彼はそれらのことを、後に思へば自らのために墓を掘るやうなものだつたが、凡て友のために喜んで爲した。

三

八月に入ると、それ／＼の學校が休暇になつたので、勝見家の令嬢や令息は、悉く避暑に出かけることになつた。そして小野がその留守を守ることに定つた。

上の三人の令嬢たちは、避暑といふ譯ではないが、京都にゐる叔母さんの許へ、暫く遊びに行くことになつてゐた。磐子夫人の妹であるその叔母さんの、良人といふのは京都大學の工學部教授で、洛外に靜かな文化生活を營んでゐた。で、そこへ三人の令嬢は行儀見習ひ旁々夏中暫く預けられたのだつた。令嬢たちは違ふ土地へ行くことには、幾らか興味がないではなかつたが、京都へ行くことを餘り好まない様子だつた。

「……家にゐるとお母さんばかりで、つい甘えたり我儘ばかり云つたりするから、少しは叔父さんや叔母さんの所へ行つて、叱られておいでなさい。たまには窮屈な思ひもするものよ。」

夫人はかう令嬢たちに云つて聞かせてゐた。

八月の二三日頃に、冬子嬢と定子嬢と秀子嬢の三人は、羽二重に薄納戸色の廣い棒縞を染めた、清らしい揃ひの單衣を着て、朝早く特急で京都へ發つた。小野はわざと彼女等を、停車場まで送つては行かなかつた。冬子嬢とは家で別れを告げた。その頃から小野は、もう勝見家の留守番として、家に泊り込んでゐた。

「……小野さん、ぢやア行つて来るわ。左様なら。」

冬子嬢だけが、用意がすつかり整つて了ふと、出立する少し前に、小野のゐる書齋の方へ、特に別れを告げに來た。

「もう時間ですか。——ちやア行つていらつしやい。向うに行つてゐる間、手紙を上げますよ。」
 小野は彼女に近づいて、手を取つて別れを告げたいやうな心を抑へながら、ちつと見凝めるだけ
 言つた。

「あら、私厭よ、手紙なんぞくだすつちやア。叔母さんに見つかりでもすると悪いから。」
 「ちやア解らないやうにしてやればいゝでせう。お友達の名か何かで。」

「駄目よ、いけないわ。ほんとに何にも寄越さないでね。」
 「え、ちやアなるべく差上げません。でも、淋しかつたら、上げるかも知れませんよ。」

「いえ、ほんとにくだすつちや厭よ。」
 冬子嬢は猶もそんな風に云ひ棄て、皆のゐる方へ行つて了つた。

それつきり小野は、玄關で彼女の妹たちと表だつた別れの挨拶をしただけで、冬子嬢の出發する
 のを、黙つて見送らなければならなかつた。

三日四日経つて、令息たちも第四番目の小さな令嬢と共に、母夫人に連れられて葉山に赴いた。圭
 之助青年と杉浦も一緒だつた。杉浦は小野の發した手紙と電報で、うまく家の方の重圍を脱け、丁度
 い、時機に上京して來た。勝見家の方の都合からいつても、その招電は決して嘘ではなかつた。
 皆は嬉々として出かけて行つた。

後には小野一人が、廣い勝見家の中に、ポツリと残された。晝のうちには長三氏が、矢來町から通つ
 て來て、いろ／＼家務を見てゐてくれた。が、夜になると氏は、妻子の許へ歸つて行つて、そして
 勝見家に泊つてゐるのは、小野とさうして避暑地へ連れ残された二人の炊事女中だけになつた。小野

は自ら進んで引受けた留守居役でありながら、さすがに着い夏の夜に、しんと静まつた家の中にある
 と、淋しい、人戀しい思ひに捉はれない譯にはゆかなかつた。先生が遺愛の書齋の中や、その廊下に
 出してある籐椅子の上などで、考へるともなしに考へるのは、やつぱり遠く離れて西に行つてゐる人
 の佛だつた。戸外は、狭い横町ながらに、さすがに夏の夜の氣分を罩めて、白衣の人のさわめきや、
 明るい灯影の揺めきが、そこはかとなく漂つてゐた。

「今頃は彼女はどうしてゐるだらう。」

さういふ月並な感傷も、ときには胸迫る位彼に來た。彼は庭前の暗い芭蕉を仰ぎ、梧桐を透かして、
 ぼんやり夜空を眺め暮すことも多かつた。而して目はひとりでに地面の、これも小暗く茂つた、木賊
 の上に落ちた。そこには屋内からの灯が、傷くすつと糸を曳いて走つてゐた。

彼は幾度か手紙を書かうとしたが、よした。別れるときの彼女の言葉が、強くまだ彼の耳に残つて
 ゐた。餘りに自發することのみ多い戀のために、彼の心はすつかり弱くなつてゐた。彼は彼女の言葉
 をおし切つて、手紙を書くことなどは到底できなかつた。彼は遠く淋しく、まだ本體を掴み切れぬ戀
 の淋しさを胸に抱いて、思ひを走らせてゐるばかりだつた。

それでも月の前半は、『中外公論』や『地球』などといふ雑誌から、依頼された原稿の仕事があつ
 た。小野もやうやく新進の作家として、少數の雑誌から認められてはゐた。而して磐子夫人が、生
 活の方なら何とか補助するから、雑誌へなんぞ下手な作品を書いて、早くから作家ぶりを汚すな、な
 どといふ勸告を數多度受けたに係らず、彼は書かずにはゐられなかつた。一つには淋しかつたし、ま
 た文壇的に認知されることにも、かなり焦慮してゐないではなかつた。そのうへ彼は、誰が何と云つ
 ても、書かすにはゐられない氣持が、謂はゞかなり純粹な藝術的衝動が、その時分は胸に一ばいだ

つた。出来上りがどうであらうと、またそれを發表して、作家ぶりが汚れようと、こればかりは仕方がないと思つてゐた。そしてその他のことでは、どんなことでも夫人の云ふとほりにならうとしてゐるに拘らず、どうしても書くことだけはやめなかつた。で、そのときもそれらの雑誌の依頼を受ける、喜んでその仕事に従事した。あるときは先生の書齋の一隅で、恰も先生の靈感を傾けてでも貰ふやうなつもりで、一生懸命筆を走らせた。あるときは風通しの涼しい中の間で、誰もゐない畳の上に遠慮なく寝そべりながら、締切に間に合せようと思つて稿を急いだ。——それで晝のうちには、ある日はまた夜の一時は紛れた。が、どうかするとその仕事も落着いてできない程、淋しい思ひの募つて來るときもあつた。

殊に、その仕事も二十日近くに済んで了ふと、ともかく原稿の出来た安心と共に、人戀しい思ひが、矢も楯もたまらず募つて來るのを、小野は感ぜずにはゐられなかつた。そして京都に行つてゐた令嬢たちが、もう京都は引上げて、途中から葉山に赴いて、今皆が一緒にゐると聞いてからは、殊に一日でもいゝから、そこへ出かけて行つて暮したい、と、思ふ希ひに燃えてゐた。そしてつく／＼一緒に葉山に行つてゐる、杉浦の身の上が羨ましかつた。彼はいろ／＼とその避暑地の、美しい情景を想像した。大きな海水帽を被つて、波打際立つてゐる彼女。……夕暮の舟の舳に、腰うちかけた浴衣姿。……蒼い月夜の散歩。……さうした場面が、幻燈のやうに彼の眼前に髣髴と現れた。が、彼は理由もなしに、家をあけては行かれなかつた。

と、そのとき丁度夫人から、一通の手紙が小野の許へ届いた。開けて見ると中には、かういふ用向が記されてあつた。

それは、夫人の持つて行つた金が、だん／＼残り少なくなりかゝつたし、また、もう引上げる時

期も十日近くに迫つてゐるから、長三氏にさう云つて、銀行から五百圓ばかりを受取り、それを爲替なり小切手なりにして送つてくれ。もしまた小野が、今都合が悪くないならば、送る途中で間違ひの起つたりする心配がないやうに、自身で葉山まで持参して來てくれ。どつちともよろしく頼む。と、いふことだつた。

小野はそれを見ると、渡りに舟とでも云つたやうな、眺へ向きな事情に雀躍した。そして一も二もなく自身持参することに心で決めながら、長三氏に一應は相談しなければならなかつた。

「ねえ、矢來の伯父さん。——（小野ももうその頃は、親しんでさう呼んでゐた。）——奥さんからかう云つて來られたんですけれどねえ。どうしませう。明日早速持つて行つて來ませうか。」

人の好い長三氏は、まるで芝居にでもあるやうに、眼鏡をかけ直して文面を讀んだが、すぐそれに賛成してくれた。

「あゝ、さうですか。そんなら明日午前中に、早く銀行へ行つて金を取つて、その足ですぐ向うへいらつしやい。そして少し貴方も遊んでいらつしやればいゝぢやありませんか。二三日なら私一人で留守居をして上げますよ。」

「さうですか。有難うございます。それなら明日行くことにしませう。そして歸れたら、すぐ歸りますが、長くも一晩だけ泊つて、翌日は歸つてまゐりませう。どうぞ何分とも留守をよろしく願ひ申します。留守居が、かう浮腰になつてゐちやア勤まらないんですけれど、丁度仕事も済んだししますから。……」

小野はそんな餘計な辯解までして、長三氏に感謝しなければならなかつた。

「えゝえゝ、ようござんすとも。ゆつくり行つていらつしやい。」

長三氏は小野が恥しい程、飽くまで此方の心持を察してゐるやうに快諾してくれるのだつた。

三

翌日は、夏の東京によくある、とろりと暑熱にうだつたやうに、白く激んで晴れた天気だつた。朝からもうぢつとしてゐても、油汗の出さうな日だつた。が、小野はもうぢきに葉山へ行つて、涼しい海風に當れることを思ふと、勇んで家を立出た。そして日本橋の方の、ある大きな銀行に寄つた。銀行ではかなり待たされた。小野には何となく先が急がれて、待ち切れずに、幾度か壁際の椅子を立つたり坐つたりした。預り證代りの、眞鍮の圓い札を持つてゐるに係らず、他人のと間違つたのではあるまいかと、ひそかに心配にさへなつて来た。暑い午前だつたが、人は混んでゐた。三和土を歩く足音が、高い天井に反響して、金網を張つたやうな構の中、かち／＼算盤を弾く音と共に、如何にも氣忙しく暑かつた。が、やつと「勝見さん。」と支出口から呼ばれたので、小野はほつとして立つた。

金を受取ると、小野はすぐ東京驛へ駆けつけた。が、そこでもまた、運悪く三十分以上待たなければならなかつた。小野の心は、先へ急ぐ心地で、何となく焦立つた。けれども、やがて汽車に乗つて了ふと、もう二時間と立たぬうちに、楽しい團圓のなかに入れると思つて、一人クツションに頭頸を凭せながら、喜び迎へてくれるであらう冬子嬢の様子などを、うつら／＼と描いてゐた。

一人旅の汽車は、僅か一時間半足らずの間でも永かつた。而してやうやく返子に着いた。小野は案内知つてゐるので、驛前から出る乗合自動車で、すぐ葉山に向つた。自動車は矮い返子の町を抜けて、川添ひの道へ出ると、やがて白い富士見橋のあたりから、静かな海がすつと展開された。そしてその

右手の瀨には一ぱいに點々と人出が在つて、そこからは海水浴場の賑かなざわめきが、小野の心を自ら躍らせるやうに響いて来た。やがて切通しを過ぎた。

一家の泊つてゐたのは、葉山で有名な長者茶屋といふ宿だつた。その玄關に立つたとき、小野はやうやく到りついたやうな思ひと共に胸がときめくのを感じた。

「勝見さんの人たちはをりますでせうか。私は小野ですが。」

殺風景な椅子と卓子とを、假りの應接所らしく置いた玄關に立つて、忙しげな女中にかう訊ねた。

「え、いらつしやいます。が、只今お食事中ですから、少々お待ちください。」

小野は誰か出て来るかと思つて、心待ちに待つてゐた。勝見家の家では、その頃小野が行きさへすれば、きつと冬子嬢が一番先に迎へるやうになつてゐた。が、こゝではさうは行くまい。が、誰かど飛んで出て来てくれるだらうと思つてゐた。

が、女中がまた歸つて来たきりだつた。

「ではどうぞ此方へ。」

さう言つて女中は、小野を表二階の梯子段の方へ招じた。

上つて見ると、一家の人たちは幾つも食臺をつなぎ合せた、細長い食卓に就いて、樂しげに贅食を喫してゐるところだつた。見ると、夫人や令嬢たちの間に挟まれて、京都の叔母さんなる人が、――

その人とは先生の葬式の時、鳥渡顔を合せたきりだつたが、小野の方ではよく記憶えてゐた。――少し取済ました様子で、食卓についてゐた。

「いらつしやい。」

夫人はかう云つて、まづ迎へてくれた。

「お金を持つて来る序に、鳥渡一日だけお邪魔に上りました。」
 小野も、京都の夫人がゐたので、改まつてお辭儀をした。その夫人は小野が誰だか解らないらしく
 つた。

「小野さんよ。やつぱり杉浦さんたちの仲間の。」と夫人が紹介してくれた。

「さうですか。」夫人は少し氣取つたやうな、美しい聲で云つた。「ぢやアやつぱりお口が悪いのね。」
 「ですが」と、杉浦が食卓の向うの端の、令息たちの間から、親しげに口を挟んだ。「逆も小野なん
 ざア奥さんには敵ひませんよ。何しろ僕ですら、やつつけられ通しなんですからね。」

「でも、兎に角貴方の方には味方が増えた譯ね。是でやつと丁度いゝ相手になれますよ。二人束にな
 つていらつしやい。」

京都の夫人はかう快活に云つて、若々しく笑つた。

「どうも小野ぢやア、味方にとつて不足ですからなア。寧ろ餘計な足手纏ひですよ。」
 杉浦は猶も、冗談らしくそんなことを云つてゐた。

小野は口を挟む餘裕もなく、室の隅に黙つてゐた。賑かな、親しい食卓に、突然自分が入つて来て、
 何だか仲間へ入れないやうな、エトランジェの心持を感じながら、そしてとき／＼目を走らせて、冬
 子嬢の方を見た。が、冬子嬢は、なぜか少しも此方を見ずに、冷淡な顔をして、とき／＼妹たちと
 低く話をする外には、目で會釋することすらしてくれなかつた。小野は彼女が、お辭儀をしたかどう
 かさへ、氣がつかない程だつた。が、それは突然小野が現れたので、一時的の氣持で、さう餘處行の
 態度を持してゐるのであらう。いづれ後で、親しみを覚える機會もあるに違ひない、さう思つて小野
 は、別にそのときは氣にも止めなかつた。

その中に食事は終つた。それを待つて小野は、持參した金を夫人に手渡した。

「小切手にしてお送りしようかと思つたんですけれど、丁度僕も暇になつたものですから、一日遊び
 に來たいと思ひまして、自分から勝手に出かけてまゐりました。其方が安全だとも思ひましたので。

「有難うございました。——留守の間に、別に變つたこともありませんでしたか。」

「え、ありませんでした。今日は矢來の伯父さんが一人で、留守居をしてくださると仰しやるの
 で、すつかりお願ひして參りました。できたら今夜歸るつもりですが。……」

「まア今日一日位はゆつくりしていらつしやい。今日は丁度だから、皆で鰯釣りに出かけようと思つ
 て、舟を備つてありますから。」

「さうですか。では僕も仲間に入れて頂きませう。」

小野はやつと夫人から、さう云はれて救はれたやうに感じた。が、後から割り込んで入つた者の遠
 慮は、まだ彼の心からなか／＼脱けなかつた。

子供たちは、晝飯の済むのを待ち兼ねたやうに、みな鰯釣りの用意を始めた。彼等は皆水着を着て、
 杉浦の周りに集まつた。

「小野さん、君は泳げるの。」

新太郎少年が、新來の小野に對して、挨拶のやうに訊ね出した。

「僕ですか、僕は殆ど泳げません。まア犬掻きで五六間位なら、どうかかうか泳げるかも知れませ
 けれど。」

「なアんだ、それつぼつち。……それぢやア駄目だな。僕たちは是から沖へ行つて、少し泳がうと思つ

てゐるんだのに、ねえ、杉浦さん。」

「えい、沖へ小野を置いてきぼりにして、泳いで歸つて了ひませう。」
杉浦もそんな風に合槌を打つた。

「ふうむ、そんなに泳げるのかい。」

小野もわざと大仰に、眞顔で訊き返した。

「泳げるとも、來年は江戸島位泳げるやうになるぞ。」

少年も無邪氣に威張つた。

「それぢやア沖へ置いてきぼりにされに行かうかな。何アに關ひやしない。そしたら奥さんや何かと一緒に大島へ漂着するばかりだから。……」

すると、その話に怖えた譯ではあるまいが、次女の定子嬢が、急に云ひ出した。

「お母さま。私、一緒に行かなくてもいいでせう。何だか厭だから。釣なんてちよつとも面白くないですもの。」

「さうかい、厭ならおよしよ。」

夫人はすぐにそれを許した。と、第三女も云ひ出した。

「私も止すわ、母様。」

「私もよ。」

四番目の博子嬢も、一緒になつて云ひ出した。この三人の娘は、大抵の場合一緒に、行動を共にしたがる傾向があつた。

「おや、急に皆よして了つたね。そんなに怖氣がついたのかい。そんならおよしよ。その方が却

つて、心配がなくていい位だから。」

「それぢやア叔母さんも残つてゐて、留守居の仲間を監督して上げようね。」

京都の夫人まで、またさう云ひ出した。

「それや卑怯ぢやありませんか、奥さん。」杉浦が傍から云つた。「敵に後を見せるなんて。」

「貴方がたに後を見せるんぢやないのよ。鯨に後を見せるのよ。私、一と鹽位の干物になつたのでなくちやア、鯨は大嫌ひ。」

かう云つて、京都の夫人は鮮かに笑つた。

「ぢやア、さういふ連中は關はない、と。」杉浦は云つた。「ところで、冬子さんはそんなことはないでせうね。貴方が行かなきゃア、舟は動かないから。」

「まア、私も行きたくないのよ。」

皆に先を越されて、云ひそびれてゐた彼女は、きまり悪げに云ひ出した。

「冬子、併し夫人は云つた。「お前はおいでよ。さうみんなやめちまつちやア、女は私一人になつちまふぢやないか。」

「お母さま一人で澤山よ。」

「澤山ぢやありませんよ。」杉浦はまた冗談半分に勧めるのだつた。「貴女が行かないと、海が荒れでもしたとき、生贄に沈める者がない。」

「お姉さまはおいでなさいよ、私たちの代りに。」と、妹の定子嬢も云つて、更に同意を求めるやうに、下の妹たちを顧みた。「ねえ。」

「さうよ。お姉さまは行かなくちや悪いわ。」

「行つてらつしやう。」
妹たちも口を揃へて云つた。

小野も、さうなつて來ると、何か一言、勸めないではゐられなかつた。それで、勇を鼓して云ひ出した。

「どうです、おいでなさいよ。是非。」

と、冬子嬢はそれに答へたともなく、冷淡に拒絶した。

「厭よ。私、行かないわ。」

その言葉は小野の耳に、一倍鋭く響いた。

で、行くのは結局夫人と令息二人と、圭之助君に杉浦小野の六人きりになつて了つた。小野はすっかり張合の抜けたのを感じた。そして彼は彼女が、先刻から何となく自分に強ひて冷淡にしてゐるらしいのを、内心淋しく感ぜずにはゐられなかつた。

舟はもう下の磯に來てゐた。そして一行の出で乗るのを待つて、それは直に漕ぎ出された。二人の船頭が、交る／＼船を押したり、舵を取つたりした。

やがて小一時間も漕いで、長者ヶ鼻の沖へ出ると、舟はゆらりと留められた。見るとそこらには、同じやうな釣舟が、二三艘漂ふやうに碇を下してゐた。

釣は始まつた。小野も勧められるまゝに、船頭の教に従つてやつて見る事になつた。船頭が数多の釣糸を出して、二つづ／＼釣のついでゐる先へ、友餌をつけてくれると、それを海中へ少し垂れるか垂れない間に、もうすぐピク／＼と手應へがあつた。そして急いで上げて見ると、その糸の先には間違ひもなくびち／＼と手頃な反撥の力を以て、鱒が吊し上げられる。……それはときとすると、二つ

の釣へ同時に一尾づ／＼釣れることもあつた。極めて造作なく、しかも頻繁なものだつた。

少年たちは、實に喜んで釣つた。さすがに失敗も多かつたが、彼等は一尾釣る毎に、聲を立て、騒いだ。夫人も終ひには釣糸を手を取つて四五尾釣り上げた。圭之助君は一番巧みだつた。杉浦もうまかつた。皆は吾を忘れて釣つた。

が、小野は、暫く釣つてゐる中に、何だか氣持が勝れないのを感じ出した。そして生欠仲が出だした。

日は熱く、薄い雲を透して、とろりと中天に在つた。風はさう無かつた。そして沖の水間は、ゆらり／＼と底揺れがして、その度に鈍い銀色をぎらり／＼と反映させ、深い海水帽の中まで、妙に眩しく照りつけた。

小野は不意に、堪らなく不快になつて來た。それで釣りをやめて、暫く胴の間に横になつた。そして眩暈をできるだけ押へようと思つたが、舟の揺れは横になればなるほど、ゆらり／＼と更に氣持悪く彼に感ぜられた。そしてそれと同時に、舟底の方から來る、腐つたやうな魚介の臭が、ぶんと強く鼻について來た。と彼はもう胸苦しく、何ものか込み上げて來るのを感じて、舷にじり寄つたまま、それを海中に吐き棄てねばならなかつた。……

「どうした、おい小野。」

「どうしたの、小野さん。」

二人は驚いて、此方へ寄つて來た。

「何でもない。鳥渡酔つたんだ、もういゝ。」

さうは云つたものゝ、小野は苦しかつた。さうして人々が、喜んで釣つてゐるのを、妨げたくない

瘦我慢から、再び顔を上げようとしたが、頭がぐら／＼としてまた突つ伏した。さうしてもうできるだけ早く、陸の方へ歸りたいと思つた。そのとき彼はなぜ、冬子嬢と一緒に陸に止まらなかつたかと悔いた。

人々は心配して、舟を返すことになつた。小野はもう舟の中に寝たきり、只管陸に漕ぎつくの待ち兼ねた。

舟が着いて、陸に上つたとき、小野は眞蒼な顔をしてゐた。そしてやうやく宿へ歸りつくと、階下の空いてゐる間に、床を取つて貰つて横にならなければならなかつた。

併し、さういふ半病人の状態であつたら、彼は冬子嬢の介抱に來てくれるのを、期待するやうな心持がないではなかつた。

が、冬子嬢は何處かへ行つてゐて、すぐ心配して來てくれはしなかつた。そして、夕方になつてから、鳥渡小野の寝てゐる部屋へ、半ば閉てた障子の外から顔を出して、

「どうして？」と覗き込んだだけだつた。

「もう大分気分も癒りました。——お入んなさい。」

小野は幾らか元氣づいて、待つてゐたやうにさう云つてみた。

「厭。」

彼女の答は簡單だつた。

「どうして？」

「だつて、叔母さんがゐらつしやるから、貴方の傍に行くのは厭なの。」

さう云つて彼女は、向うへ行つて了つた。そしてそれつきり、小野の寝てゐる所へは顔も見せなかつた。

つた。

小野の舟酔は、やがてすぐ癒つたけれど、冬子嬢の冷淡さは、小野が歸京するときまで、どうしても癒らなかつた。小野は失敗に終つたこの葉山行を顧みて、何となく満たされぬ心を抱きながら、翌日一人淋しく東京へ歸つて行つた。

小野が、冬子嬢と自分との間に、際があるやうに感じたのは、そのときが初めてだつた。けれども彼は、彼女の心を、決してまだ疑はなかつた。そしてそのときの冷淡さを飽くまで、彼女の言葉通り、叔母に對する羞恥から、強ひて執つた態度だとのみ信じた。

その夏は、華やかだつた春の後を受けて、小野にとつては物足りない夏だつた。

第十四章

秋は來た。季節の秋と共に、小野には何となく自分たちの戀愛關係にも、冷やかなものが忍び込んできたやうに、感ぜられてならなかつた。が併し、それはごく僅かな、ほんの肌觸りにも過ぎぬ位のもので、彼が持前の敏感から、又戀するものゝ本能から、さう無意識に感じたに過ぎなかつた。けれども、それは全然形のないものではなかつた。

勝負の一家が、避暑地から引上げると、それからすつと杉浦は榎町の宅に泊つてゐることになつた。が、小野はそれを杉浦の生活の安定のために、心から喜びこそすれ、決して羨みもしなかつた。